

士治正年十岁二十月十一日

卷之三

不毛の原野よりして、馬車に依頼して牛車に依頼するの外、盛んなる農事と起し或は又工商の道を開かん所と陸東をさし次第あらんと、我輩今日に於て英國一般の地脈地質を見渡すに窮は斯る胸感の生ずるゝ免れざれば數百年以前の當時、未開不毛の實歎と目撃したる人が今日の隆盛と豫言する能はざるもの怪しひに足る可らず古今前後相較べて同左英國に斯くまでの如蓮華草を來したるは一に國民の刻苦勉勵に基きたる者にして謂ひる炭鉱二物の天恵は偶然其進歩と促したるの原因ならんのを覺じ英國人の脇間に「何物も人に克つとははず」と云ふの格言最も深く浸染したる者にして平生互に相助け相結び、如何ある事業を起すにも殆ど無闇なる組合組織を設けて利害得失を討定し他人の起業ありと雖も其事有益なりと信ずる時が快く之を授けて族姉相競すの擔心なく、自ら魅むるふくよて最も人の信用の深からんとぞ思ふ。利に當てば一切世人よ望む所あらずして其揚取る勇なる如たれど莫入の機械にして運転の能うる所なり。蓋し本邦の機械と謂ふて取る所とぞ思ふ。若者賛美と争ふ事とぞさて之の如蓮華草にして凡そ其産業も既中興興衰の如きの如蓮華草にして諸事淡泊に聞え其交済至て済済ある

西洋の風と機するには取捨する所あるを要す
前席小生の流美以来見聞の事物枚舉に追あらずと雖
特に歎嘆に堪へざる者は當國富裕の度に極めて高尚な
一事なり何故に此國の盛大富強今日此の如くありし
やと其原因を尋ねるに官吏の力に依りしより非ず又貴
族上流の人の庇蔭に出でたるにも非ずして全くは工商
の業と交際の便ども依頼し世界各國の富と一所に引附
けたるの結果ある事既に世人の熟知する所ならんと雖
も就中英國而して寧ろ頑固不動の精神に富むの性
質は其原因の重なる者と云はざる前らす世人聽もされ
ば云ふ英國の富は多少人爲の力なきにしも非ざる可け
れども變化無限の賜物なる銀と石炭なかせば今日の
藍運と致す說はざるは明白の次第にして英國の富に即
ち鐵炭二物の變形に遇ぐ可らず天何故に英國に私して
斯る富源を授けたりや其意を得ざる所なりなぜ故哉そ
る者あり然れども是れ徒らに成述より事を論するの空
談にして若しそ數百年前富源未だ開けず民力未だ甚
か大なるの其當時に論者をして之を評せしめあひ必
ずや昔はん曰く英國ハ天惠の乏しき國あるかな其地
面は平坦なりと雖も地質甚ざ疎鬆にして大木茂らず、
草木繁茂にてて(前席古占基ノナシ)其葉甚く

卷之三

と恐るゝ者の如し即ち西洋男女交際の興味は實に此邊に在りと稱す可く夜會踏舞男女相擁して踊るの類はやはり其樂みの末など云はざる可らず此の如く西洋の交遊には非常に快樂多しと雖も其割合に金錢と浪費をせ
ハ甚だ少く我輩は所々宴會の費額と聞く毎に諸品高價ある英國にて如何なれば斯くは其價の廉なるやと寧ろ不可思議の思ふ爲すなり蓋より金満家などの夜會に於て其賛澤限りなく華美人目を眩せしむる者も少なからずと雖是は西洋富豪家の獨り爲す可也所にして東洋貴國の人の學び得べき事又非ず故に暫らく例外のほ
しとぞ前編我輩の記載したる所は一般中等社會のの様なに係る宴會にして之を日本人中等の宴會則らむ茶居の御座走るるに比較して大に其價の廉である可と感する所以ハ全く之を英人節儉の徳と誇せざる可
ハ當地近在の者の休日等に倫敦に來りて、上等芝居を見物する其有様を見るに大抵の人は廉價別汽車にて乗るが最も全く空腹を凌ぐだけの用意に止めて極端に出來ず者は未だ我輩に聞かざる所にして此一事亦以て英人節儉の風を知るべきなり。

球場は有合せの邸園と其儀に使用したる者にして玉玉臺も一度之れと据る時の其用永遠に涉りて客と快樂添ふるの良具なれば東洋一夜千金と搾つて贅澤とは日にして論す可らず我輩斯く英國交遊の風の美あると稱讚したれば人或は難して曰ハシ西洋の交際は婦人を憚るの道甚だ究屈なる者にして例へば煙草を斯ち酒を禁じ放肆を憚み笑聲を戒むる等怡も婦人の鼻息を窺に均なく六尺大男兒の所業には不甲斐千萬の次第なれども之に反え東洋流の交遊には談笑自在にして己れの天眞と全人せざる所なま西洋の禮は假面と裝て婦人の前を修飾するに過ぎざる者ありと、然り論者の言の如く西洋の禮に於て之婦人を尊敬するは勿論なりと雖リ其私屈尊風景は決して論者に説く如知者に非ず正正確會食の時もその男子が故さらに婦人を尊敬して飲酒喫煙と慎むに相違なけれ共此れは一偏正面の儀式として其趣間に周旋し或は酒まで先持參し來りて男子の顔面珠し或は談話室に到りても男子は放意高談して少とも憚る所なきに婦人は其烟臭とも慮とせずして快く来報返として今は只管男子の快樂を助くるに遑からざりて

は殆んど東洋人の想像に浮びざる所なり日本などにて假りにも御馳走と名の附く可き宴会なれば美酒佳肴申すも更なり聽者羅羅併傍席間不倫の徒の玉席上に围绕して來賓士君子の面前に詔説せ術至らざる所なく夕千金の豪遊主人公の散財は莫大ならんと雖も客の之情は左のみに濃うならず形體の奢り倍々盛んにして神代扶搖轉た冷涼を感ずる之孰れの宴会も皆然らざる斯る外歐盧飾の饗宴は實に英國人等の想像に左せざる所にして先づ當國にて中人以上の宴会と申せよ酒食の用意は勿論のことあれども其體裁至て淡泊にて固より酒池肉林の豪を張るに非似例へバ毎週一日か又は毎月兩三度との都合次第にて其日を定れば豫て知己朋友に案内し庭園には投球場、屋内には玉突臺設らるる等其邊の準備到らざる所あきこ以れども

卷之三

官

卷之三

留地ノ地主明治廿年
○大藏省告示
本年十一月

第二號目次●著者略傳●十文字
介君●著者略傳●將來の見込●風
學士・農藝化學士酒匂常明君●
養飼家の穴(米花生)●篤拉子
の試(理學士佐々木忠二郎君)

專賣

米 袁 攷

器機類製定
大形 中形 小形
五升磨 三升磨 二升磨 一升磨
器機木製定價